

シノド会議の総括

大ローマ布教所長
山口 英雄 Hideo Yamaguchi

第14回定例シノド会議は、本年2015年10月4日(日)より10月25日(日)まで3週間にわたって開かれた。参加者は全世界より集った270名。その内訳は枢機卿74名、大司教72名、神父は102名を数えている。その他18名が参加した。ただし投票権のあるのは前記の270名だけである。議題は昨年臨時シノド会議に続いて「家族」問題である。昨年のシノド会議は10月5日より19日まで2週間にわたって議論された。

シノド会議に先立ち、法王は9月末、アメリカのフィラデルフィアの「家族」に関する会議に出席し、「家族」について次のように述べている。

「家族」とは人間に対する神の夢。また各男と各女の幸せの夢と定義するのは美しい。この夢は現実から逃避しない。差し迫ったシノド会議で人間性の興味深い期待に答えるような責任を果たすことが出来るような解答を待っている。家族は教会のみならず、社会にあって人間社会の積極的な課題の一つであり、創生の一つでもある。

家族の課題を挙げて見よう。生命を生み出し、新しい関係を作り、社会活動をなし、社会関係、家族関係を作り出すことである。こういう中において家族は現代の奥深い悪に対して第一番の薬となりうるのだ。シノド会議によって、教会組織が多数の家族の唯一の家になることを希望する。教会の経験は家族を家族たらしめ、そうさせることである。家族は、また、傷ついた心を癒す場所でもなければならぬ。

今回の定例シノド会議に先立ち、法王は10月5日のアンジェルスのお話で今回のシノド会議の方向性を示した。以下はその要旨である。

家族の基本は夫婦である。夫婦は結婚をもって始まる。結婚する夫婦は神が許したものであり、不変的なものである。それゆえに教会は結び合わされた夫婦の統合性と不変性を護るのだ。我々は現代の考え方やその時、その時の感情によっては動かされない。我々は一つが他のものを判断する基準にならないことを知っているし、そのことを誇りに思う。傷ついた夫婦に対しては、我々のもてなしと慈悲の油をもって傷口を癒すのである。この3週間の課題は、これらの夫婦を教会に誘うことであり、現代社会に適合させることである。

そして法王は話を進めた。

法王ラッツィンガー(ベネディクト16世)は、「真実のないことは常識の世界に滑り落ちて行く。」また法王ルチアーニ(ヨハネス23世)は「主は人間性を柔和さと懸念をもって眺めている。同時に母の眼差しも持っている。」法王ボイテューワ(ヨハネ・パウロ2世)は次のように述べている。「誤りや悪は常に批判され、糾弾されるべきものだ。我々は時代を愛し、我々の時の人を愛さねばならない。」現法王はアンジェルスで話を続ける。

現代は新生児が少なくなっている時だし、妊娠中絶、離婚の、自殺の、環境汚染の、社会の汚染のパーセンテージは上がっている。その中において、持続性のある、貞節的、良心的、安定性のある、地味豊かな愛は嘲笑されたり、古くさいものと思われている。しかし、今日の人間の理解するように呼びかける人々によって、結婚に関するキリスト教の教えは容認されている。とは言っても、そのことを生涯堅持することは難しい。そのために教会はそういう人と共に、信任性の中に、真実の中に、夢の中に生きることを共有するのだ。キリストは次のように言った。「健康な人は医者が必要とはしない。必要とするのは病人だ。私は義のある人の所に来たのではない。むしろ罪ある人の所にきたのだ。」と、つまり「野の病院」である。「扉

を叩く者にはドアはいつも開いている。」のだ。

「家族」に関して論議をすることに、独身の身の神父たちが適しているだろうかという意見もある。しかし、我々は家族の問題のことは良く知っている。南アフリカの枢機卿ウィルフリッド・フォックス・ナピアーは、ツイッターを通して答えている。具体的に申せば「私は9人家族の中で育った。その中で男きょうだい、女きょうだいと共に彼らの子供の子育てに協力した経験がある。だから、『家族』について、発言も出来るのだ。」

シノド会議の期間中、10月20日(火)サンタ・マルタ教会でのミサの説教で法王は次のように述べている。

「神の愛には際限はない。というよりは、有り余る程だ。心は開いていて、我々を待っていて下さる。」「神があたえる友情、救済とは全てわれわれのものだろうか。我々が良きことをしたとき、神はちょうど良きものを、我々に上に押し上げ、愛に満ちたものを下さる。神は十分と言えるまでの愛を下さる。罪を凌駕したものには恩寵が与えられる。これが神の愛であって、正しく際限はない。神の心は閉じられることはない。いつも開かれているのだ。神の前に行けば、我々を抱きしめてくれる。神はちっぽけなものではない。神は全てをくださる。神は一時も静止していない。神は我々が心を入れ替えるのを眺め、待っている。神は出かける。我々を探しに出かけているのだ。これらの話は『迷える子羊』の中の、『失ったコイン』の中のエピソードの中にも出て来ることだ。」

この3週間の会議で94の問題が討議された。議決には出席者の3分の2以上の投票数が必要となる。満場一致というのはあり得ないというのだ。それは、皆それぞれの意見があって当然だということだ。それらの議題は、大部分可決されたが、初めから考えられていたように、同性婚や事実婚に対しては、やはり否定的であった。つまりキリスト教の教えでは、先ず男(アダム)があり、一人では寂しいだろうということから女(イヴ)が創られたというのである。神はその二人を夫婦としたのであり、それ以外には何も創ってはいない。この夫婦によって、家族が構成されたのだという。

先に述べたように、現代社会では、教会法に、市民法に基づいた結婚式を挙げないで、同棲しているものが増加している。この問題に対して教会は、聖職者は真摯に対応し、適時聖書の光に当てながら、真の結婚の意義を、家族の十分な真意を示し、教化して行く必要がある。

女性は男性に比べて、一段と低いものと見られる傾向もある。男性も女性も対等である。教会の中でも女性たちの価値を見出し、責任を持たせねばならない。社会の中でも、特に教育世界、政治世界にも女性たちが進出するのを期待するものである。

ヨーロッパでは、近年キリスト教は退潮していると言われていた。その原因の一つに、新生児減少の時に、正式にキリスト教会で結婚したものが、その後折り合いが悪くなり離婚したものが沢山ある。現在のカソリックでは離婚は認められていないため、再婚する場合、キリスト教会で儀式をあげることはできない。その再婚したキリスト教信者でも、教会の中に入って、聖体式に出席出来ないのだ。そのために、離婚して再婚したキリスト教徒にも聖体式に参加してもいいかどうかという議題もあった。しかし今回は結論に到達しないで、これからの解決事項の一つにされた。今暫くはケースバイケースでことを決めて行くという。